



学歴なんか ぶつとばせ

高校中退の若者たち

門野晴子



学歴なんか ぶっとばせ

高校中退の若者たち

●

門野晴子



北斗出版

がくれき
学歴なんかぶっとばせ

かどの はるこ
門野晴子 著

著者略歴

1937年、東京浅草に生まれる。思春期カウンセラー、フリーライター。

〔主要著書〕

「うちの子に手を出さないで」(学陽書房)

「愛するもののために」(学陽書房)

「少年は死んだ」(毎日新聞社)

「ふたりは女」(学陽書房)

「ザ性教育Q & A」(青山館)

「わが家の思春記」(現代書館)

現住所：〒178 東京都練馬区東大泉6-3-20

1989年 9月30日 初版第1刷発行

発行所

株式会社 北 斗 出 版

郵便番号 101

東京都千代田区神田神保町1-8 第一野ロビル

電話 (03) 291-3258 FAX (03) 291-2074

振替東京6-27052

印刷 三和印刷 製本 三水舎

© 1989 by Haruko Kadono. Printed in Japan.

ISBN4-938427-46-X C 0037

*定価はカバーに表示してあります

目次

まえがき	1
一 “自主退学”させられた智子さん	5
二 もと暴走族の若き父親、国嶋くん	21
三 インドのお坊さんになった青年	37
四 高校を中退してよかった	59
五 学歴がなくても営業では負けないネ	77
六 “なんとなく辞めちゃった”中退組	91
七 教師が語る“教育困難校”の実態	101
八 カリフォルニア“教育ショック”	119
——こんなに違う日米学校事情——	

九	知られざる通信制高校	181
	あとがき	199

装丁 宅間紀子
イラスト 三間睦代

まえがき

「高校中退者が毎年一万人以上も出てるんだって。知ってる？」

「うん、新聞で読んだわ。でも一万人と言われてもピンとこないんだけど」

「なんでも、全国の普通規模の高校で毎年一クラスが消える勘定だって聞いたけどねえ」

「ええっ!? どうなってんの、いったい。そういえば、うちの子のクラスでも何人かこなくなったと言ってたけど、理由は誰も知らないんだって……」

母親たちの井戸端会議の話題も、誰の子がどこの高校や大学へ入ったということよりも、学校のありかたに対する疑問や怒りに変わってきた。

一万人という数字は、私の生活実感で言えば、わが子の友人、私の友人の子どもといった範囲で中退者がザラにいる現象である。

文部省調査の無表情な数字に疑問を抱いた私は、私の周囲で無理なく出会える高校中退の若者た

ちの肉声を聴きはじめた。

どうして辞めたのか、いまだどう生きているのか。それは、高校は出たけれど学歴社会の壁に頭をぶつけながら生きるふたりのわが子を、ハラハラと見守る私の一番の関心事であった。

手広く中退者を分析するつもりは毛頭ない。私に話してくれる若者の声に、じっくり耳傾けただけである。その結果、自立したステキな若者ばかりが登場することになったのは、傷ついた羽をまだ癒せない人たちからは、取材を断われたことによる。

むろん、ステキな若者たちも、学校で傷ついて辞めたほうが多い。にもかかわらず、教育関係者は冒頭の数字に危機感を抱いておらず、良心的教師からはにっちもさっちもいかない白い吐息がもれる。

私は毎度お馴じみの閉塞状況の学校に出口を求めて、日本よりも青少年問題が逼迫しているはずのアメリカに飛んだ。アメリカでもっともリベラルといわれる地、カリフォルニアの小・中・高校を見学、取材し、高校ドロップアウトへの対策を見聞して、その人権保障ぶりに私が吐息をつく番。

先のステキな若者たちは、日本の特異な学歴社会で、学歴をもたずとも生きるすべを、そのしんどさとすばらしさを示してくれた。だが、学歴をもつものたないことと、*「学ぶ」* こととはちがう。

働き生きる中で自己教育していく中退者のひたむきさに拍手を送る一方で、私たちは日本の教育関係者の怠慢ぶりを追求していかなくてはならない。文部省のかけ声だけの生涯教育ではなく、生

涯にわたっての「学ぶ権利」の保障を、カリフォルニアに学びたい。

せめて高校入試がなく、一八歳まで完全無償教育で、「生徒にどんなことがあっても高校卒業までは責任をもちます」（教師の言）くらいは、超経済大国の日本でやれないほうがおかしいのだ。

のびやかなセクシュアリティを生きるかの国の高校生の一瞬の輝きと、押しつぶされて「生きながらに死んでいるような」この国の高校生のちがいを思い、改めて私の中にどす黒い憤りがこみ上げてる。

高校中退者だけでなく、小学生からのおびただしい登校拒否者の現出に危機感をもたず、なお学校の鎖国状態にあぐらをかきつづける教育者は、文中（七章）にあるように、「中性子爆弾のように学校という建物を残して、生徒という人間を死滅させてしまうのか」を厳しく問われるだろう。

いま、子どもたちの学校ばなれ、学校追い出されに対して必要なのは、教育論議にすぐさま出てくる「教師の立場」をわかることではなく、学歴に狂奔する「親の願い」にこたえることでもなく、ましてや文部省のコトバヅラにふり回されることではない。

私たちおとなが、子どもをもつものたないにかかわらずこの学歴社会を支えるすべてのおとなが、いまわからねばならないのは、「子どもの立場」だけではないのか。

教育の主人公は子どもである。断じて、子どものための学校でなくてはならない。

この国の未来を子どもたちに託すならば……。

— “自主退学”させられた智子さん

それは教師のバシッという一発から始まった。奈良・斑鳩の里にある県立斑鳩高校に入学した一年生は、オリエンテーリングという一泊の春の課外授業のため、山の宿舎の庭に整列していた。太川智子さんは男の担任にいきなり殴られたのである。

「なにするねん」

「なんや、その靴は！ 指定の靴をはかんか。すぐに脱げ。脱いではだして帰れ！」

彼女は偏平足だった。ただでさえ学校指定の靴が合わないのだから、山歩きはこの日にははき馴れた靴をはいていった。入学して一カ月余、生徒たちはこの高校の度を過ぎた規則の厳しさもまだわからなかった。

はだして帰れといっても一応は山道だ、まさか本気で言ったのではないだろう。——智子さんは

靴をはいたまま帰ってきた。ところがこの一件で、彼女は「反抗的な生徒」のレッテルをはられてしまったのである。

学校指定の制服、持ちもの、靴、スリッパまでの徹底ぶりは、軍隊好みの教師の美意識による「非行化防止」であると同時に、業者のリベートといううま味のためとも言われている。軍隊で靴に足を合わせた不条理は現代の学校に引き継がれ、足に靴を合わせる(個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成——教育基本法)のではなく、靴に足を合わせる(管理と強制)教育が大手をふっているが、智子さんが学校を追われる発端が靴の件とは、なんと象徴的だろう。

校則違反者は彼女ばかりではなかった。だからこそ教師はやっきとなり、見せしめのためのターゲットを作る。靴の違反者も何人もいるのに、なぜ彼女だけが殴られたのか。「反抗的態度」も大勢いるのに、なぜ彼女だけがマークされたのか。

たとえば、この後の遠足で法隆寺に集合した日、智子さんは足に合った靴をどうしても認めてもらえず、担任がもってきた靴をはけば遠足につれていってやる、と言われた。

売り言葉に買い言葉で彼女は「つれていってもらわなくていい。帰る」と言う、すぐ後ろにいた私の娘のこれも智子が「あたしも帰る」と、ふたりの智子が帰ってきてしまった。が、私の智子はとがめられず智子さんはマークされた。

その理由はいまどきマサカというものだが、当時の「証人」の言を彼女はふり返る。

「美術の先生ってはぐれた存在でね、いつも美術室にこもって絵を画いたりお茶を飲んだりだからよく話をしたのね。その先生が『おまえ、職員室で噂になってるな』って言って、『さからってるの私だけじゃない』って私が言ったら、『同じ条件でも、母子家庭というのはあらかじめ差別されることはまちがいない』とか言ってた」

同じことをやってもそれに「欠陥家庭」という教師の偏見が裏づけされ、彼らの中にくっきりと色を帯びる。ささいな言動まで反抗的態度と受けとられ、職員室の話題のタネとなり、やがて全教師に色めがねで見られるようになっていく。

ふつうの女の子が「問題生徒」にされていく過程をゆっくり見てみよう。教師たちが初めから悪意で臨んだわけではない。個々の「注意」は教師の善意によるものだった。まず偏見がありマークしたにせよ、教師としての使命感から働きかけた「善意」であつたろう。

「あの子はオレが話してやらんと心を開かないから、といった調子で、尊大さがミエミエなのよね。当人は金八先生やってるつもりなんだろうけど、クサクって聞いてられないよ」

「善意」をふりまく教師は、えてして生徒指導に自信のある中堅教師であり、その唯我独尊ぶりは思春期の子どもたちをもっとも嫌うところだが、当人はまったく気づいていない。「おまえのためを思ってこんなに言ってるのに、おまえはなぜわからんのだ」とえんえんと説教をし、耳を閉じて苦痛に耐える生徒を「あいつはダメなやつだ」と結論をくだす。評価の決定を握り絶対優位

に立つ教師が「生徒と話しあう」とは、服従させるための説教のことである。

親がくどくどと同じことを言えば、子どもは「うるせえ！」と一喝できる。しかし智子さんは教師の「注意」に従い、指定の靴に足を押しこめた。入学間もなく、男子が退学させられていたこともある。いつの間にか消えるようにその子はいなくなっていたと、智子は言っていた。

だが、校則は頭の中から足の先までと、「高校生らしさ」のすべての言動におよぶ上に、違反か否かの判断は教師の主観が左右する。娘が同じ制服を毎日同じように着ていつににかかわらず、スカートが長い短いと注意されたことがいい例だ。智子さんばかりでなく、ほとんどの生徒が愚にもつかない指摘をされているのだが、マークされた生徒のそれは回数が圧倒的に多いことだろう。

教師のほうは、要注意の女子だからこらしめてやろう、と声をかけたわけではないと思う。「おい、ちゃんとやってるか」「おい、世話を焼かせるなよ」くらいが多く、ひとりの教師にすれば日に一回だったかもしれない。しかしそれを受ける側にすれば、廊下などですれちがう教師にことごとく言われるのである。しかも挨拶ではなく「注意」だから、いちいち足を止めさせられる。

うるさいと言わないまでも、ブスッとするだろう。ああ、またか、と返事をしないこともあるだろう。すると教師は、やっぱり反抗的な子だ、と「確認」し、担任や学年主任に報告し、彼女は

カウンセリング室に閉じこめられて説教されることになる。

教師の善意が彼女を追いつめていったといえ、なにやらブラックジョークめくが、教師たちは意識的に墓穴を掘ったとはいえないまでも、結果的にはそうなってしまった。むしろ意識して自分たちがいまなにをやっている、その先がどうなるのかを見通せなかったところに問題があらう。というのは、ほかの生徒の髪が長い、ネクタイをしていないなどへの注意と違って、彼女には叱る目的が「反抗的態度」という漠然としたものだったから、「改心」が見えにくく、そのため終わりのない拷問に突き進んでいったのだと思う。

ただし、これは好意的に考えればである。叱られている本人が「なにを叱られているのかさっぱりわからなかった」と言い、教師に「だからなにをどうすればいいのですか」と質問すれば、「それが反抗的だというんだ！」と怒鳴りつけるのでは、ヤクザのイチャモンツケと変わらない。

密室のいじめはエスカレートする。突き進んでいったのは教師の側の精神的拷問だけでなく、いじめられる側の心情も当然突き進む。

「説教の回数も時間も増えていったね、私だんだん自暴自棄になっちゃった。なんだその言葉は、なんだその態度は、と言われるたびに、ほんとに反抗的になっていったね、走り出してとまらなくなつたの」

彼女は自分の意見をもったしっかりした高校生だったから、授業中も発言する子だったが、教師

に無視されるようになってやる気をなくしていった。説教で授業を奪われ、勉強もわからなくなる。学校を休む。悪循環である。罪状は「反抗的態度」に「怠学」が加わったが、どちらもある時期から教師による意図的な産物であるといえよう。学ぶ主体の生徒から授業を奪うなどとは、授業を妨害でもしないかぎりやってはならないことなのだ。

学校を休んでも家ではひとりぼっちだったから、智子さんは友だちのいる学校に行きたくてたまらない。ふつうならば、教師や子どもものいじめにあえば登校拒否になるだろうが、家庭に恵まれないう子どもにとっては友だちが家族であり、学校が家庭なのである。だが、友だちにあいたくて登校すればカウンセリング室に連れこまれ、それがいやさにまた休む、という日が続いた。

当時は毎日授業を奪われていたわけではないが、ゆっくりと、しかし確実に、彼女は学校から閉め出されていった。

では、教師の偏見以外に、彼女の家庭は問題がなかったのか。最初にお断りしておきたいことは、母子家庭だから問題があるのではなく、問題のない家庭などないということをまず強調しておきたい。

智子さんが小学校のころは、両親、姉、兄と揃った家庭だった。父親が酒好きという以外はさしたる問題もなく、母親は専業主婦だったという。

現代の核家族は基盤がもうい上に、不幸は不思議なことにいっぺんにやってくるものだ。基盤のよろさが、起こらなくてもいい不幸まで誘発するということだろうか。

父親は仕事がうまくいかなくなって酒量が進み、酒乱となる。母親はその辛さを長女に向ける。長女は高校途中で大阪へ飛び出したが、病院で看護婦見習いをしながら看護学校へ通う。智子さんが中一のとき、両親は離婚し、父親は故郷の九州へ帰った。母親は大阪の企業の主婦に就職したが、間もなく当時高校生の長男は車の事故を起こし、働いて弁償するために家を出た。母ひとり子ひとりとなって智子さんは主婦業をやり、働く母を助けた。

母子家庭にはちがいないが、なんということではなかった。教師たちが母子をそっとしておいてくれれば、智子さんはふつうに高校を卒業し、就職して母を助けたはずである。

親類の世話で母親が就職した会社は、家庭のゴタゴタを極端に嫌うところだった。そういう勤務先へ教師は幾度も電話をし、学校へ呼び出そうとするが、母親は会社を休めないために行けない。すると教師は社に電話をかけ、長々と文句を言う。母子家庭こそ母親の職場は命綱であるのに、教師の電話は度重なり、母親は悲鳴を上げた。

母娘喧嘩が激しくなる。仕事で疲れた母は、娘の身になにが起きているのかを思いやるゆとりがなかった。親にとって教師の存在は絶対である。教師があればどうのだからこの子は悪い子なんだ、となっていくのがふつうであって、真の親バカは少ない。学校をやめてくれればせいせいす

る、という気持ちに傾いていった母親も学校のワナにはまったといえよう。

学年末、学校は智子さんに留年を宣告した。女子の留年は前例がなく、留年を言い渡せば退学するだろうと学校はふんだが、友だちが家族の彼女は学校に行けるだけで幸せだった。母親との関係が悪化してからますます友だちが大切な存在になっていたこともあり、一年生をやり直すことを承知した彼女に、教師たちはあわてた。

三月、母親の帰宅時間を狙って、担任のしつこい家庭訪問が続く。要旨は、学校を続けるならいままでの態度では駄目だ、校則を守れ、勉強もしろ、というものだが、狙いは退学をさせることにあるから、ハイ、わかりました、では納得せず、くどくてとりとめのない脅迫の連続。

うんざりした母親は、「お母さん、こんな子をもってご苦労なさったでしょう」との担任の分断作戦にホイホイと乗ってしまった。「ええ、私はちゃんと育ててきたのに、この子が言うことをきかないからこんな子になってしまっ」

いざとなればわが子よりも世間体をとる親はいくらもいるが、担任と母親が一体となって智子さんを追いつめる。最終的返事を三月末日に切られた彼女は、絶望のあまり家にあった風邪薬と鼻炎薬を全部飲んでしまった。後者は一日二錠が限度の強薬である。

母親は残業で夜遅く帰宅し、娘が眠っていると思って寝てしまう。夜半に薬を吐いた娘にも気づかず、朝は春休みで眠っていると思った母は出勤してしまった。苦しいと私に電話をかけてきた智